

地域まるごと共生社会

社会福祉法人 岐阜羽島ボランティア協会
〒501-6232 岐阜県羽島市竹鼻町狐穴 719 番地 1

助成事業の概要

障がいの有無にかかわらず全ての子どもたちが安心して暮らせる社会の構築、それが当法人の目指す姿です。障がい福祉サービスを中心とした事業を展開するなかで、障がいに限らず様々な生きづらさを抱えた人々の存在を知り、地域全体で支えることの必要性を痛感しました。そこで、地域住民への意識啓発と地域で支えるしくみづくりのノウハウを学ぶため、全5回にわたる研修会を開催しました。

【第1回】

5月20日（日）13:30～17:00

場所：不二羽島文化センター 401

参加者：104名

- ・講演「助けてと言える社会へ ～困窮者支援の現場における伴走型支援～」
講師：NPO 法人「抱樸」理事長 奥田知志氏
- ・鼎談「地域共生社会を考える」
メンバー：NPO 法人「抱樸」理事長 奥田知志氏
（一社）よりそいネットワークぎふ代表理事 中川健史氏
精神保健福祉士 今井真美氏

【第2回】

8月11日（土・祝）13:30～16:45

場所：不二羽島文化センターみのぎくホール

参加者：90名

- ・講演「あんきなふるさとづくり ～飛騨市の取組～」

講師：飛騨市長 都竹淳也氏

- ・鼎談「支え合い 助け合う」

メンバー：飛騨市長 都竹淳也氏

NPO 法人ぎふ NPO センター専務理事 原美智子氏

精神保健福祉士 今井真美氏

【第3回】

8月25日（土）13:30～16:45

場所：不二羽島文化センター 401

参加者：45名

- ・講演「触法障害者・高齢者支援を考える ～社会で共に生きる～」

講師：福）大阪手をつなぐ育成会支援センターい～なグーテン所長・相談支援室長 原田和明氏

- ・ケースワーク ～事例から学ぶ～

メンバー：講師 原田和明氏

G.H サービス管理責任者 渡邊博丈氏

相談支援専門員 桂川達矢氏

精神保健福祉士 今井真美氏

【第4回】

10月20日（土）13:30～16:30

場所：不二羽島文化センターみのぎくホール

参加者：78名

- ・講演「地域共生社会」

講師：毎日新聞論説委員 野澤和弘氏

・パネルディスカッション「どうする？地域づくり ～人・モノ・カネ～」

パネリスト：毎日新聞論説委員 野澤和弘氏

キッズスクエア瑞穂理事長 梶浦良子氏

NPO 法人ぎふNPO センター理事 有田朗氏

岐阜県中央子ども相談センター児童福祉司 大野勇悟氏

元医療少年院ソーシャルワーカー 今井真美氏

【第5回】

2月10日（日）13：30～16：40

場所：不二羽島文化センターみのぎくホール

参加者：146名

・講演「みんなで創る 地域共生社会」

講師：羽島市長 松井聡氏

・意見交換会「地域共生社会におけるコミュニティの役割」

パネリスト：羽島市長 松井聡氏

羽島市自治委員会会長 味噌巖氏

羽島市民生委員・児童委員協議会会長 浅野満氏

岐阜羽島ボランティア協会理事長 川合宗次氏

フリーランス精神保健福祉士 今井真美氏

事業の成果

【第1回目のふりかえり】

最初に、様々な生きづらさを抱えていても誰にも「助けて」と言えない社会が、「社会的孤立」を生み出していると問題提起し、次に法人の名前である「抱撲」の由来に触れ、当事者（＝傷ついた原木）をそのまま受け止める（＝抱く）ことは支援者自らも傷を負うことだと述べた。事実、生活困窮者支援の現場では、その人の人生をまるごと受け入れ一緒に走ってくれる人が求められてお

り、「抱撲」の実践する「伴走型支援」は、人生の伴走者を地域に増やし互いに助け合うコミュニティを築き上げることを目的としていた。これまで多くの生活困窮者を救ってきた奥田氏からの「ホームレス支援の現場にはスタッフもホームレスも関係なく、ただ同じいのちがあるだけ…。」という慈愛に満ちた言葉が心に深く刻まれた。

【第2回目のふりかえり】

市長自らが現場に赴き市民生活の実情を知ることと課題と解決策の両方を得ること、ひとつの問題に着目すればそれに関わるいくつもの問題が見えてくること、わずかなお金であっても気持ちを載せて届ければ市民が応えてくれることなど、独自の発想と手法によって成果を挙げている飛騨市のまちづくりについて知った。「公的支援」をテーマにした講演に対し、鼎談では市民協働によるまちづくりについて考えを深めた。地域性の違いに触れながらも、行政の役割の違いはなく、誰もが困難な立場になり得ることから、地域課題を「自分ごと」としてとらえ社会全体で取り組む必要があるとまとめた。社会的弱者の支援や医療・福祉の充実を重視する飛騨市の取組は、市長自身の障がい児の親としての視点や経験から得たものであり、自分の「気づき」を市政に活かせることは行政職員の強みでもあると行政に携わる者の心構えをも説かれ、参加者の心をとらえた。

【第3回目のふりかえり】

罪を犯す背景にはその人の抱える生きづらさがあり、それは成育歴や生活環境に起因していること、適切なサービスや支援が受けられれば犯罪に至らないケースもあることなど司法と福祉の関連性を説き、分野を越えた連携が必要であると主張した。ケースワークでは、本人の気持ちに寄り添いながら支援していくこと、裏切られても繰り返し支援をし続けていくことなど、相手との信頼関

係を築くことの重要性を伝え、相談支援専門員の役割について再確認した。

【第4回目のふりかえり】

コミュニティ機能の低下が「社会的孤立」を生み出していると指摘し、これまで家族や地域が担ってきた役割の大きさを痛感した。一方で法律や制度が拡充されても、制度の狭間で支援が行き届かずに孤立してしまう人々がいる現実を訴え、それは家族や友人、地域住民、ボランティアなど個人レベルの制度に基づかない活動（インフォーマルな支援）によって支えられていることを伝えた。パネルディスカッションでは、「出番と居場所づくり」をキーワードに、専門機関や組織だけでなく地域住民も支援者となって人を助けたり支えたりすることができる」と説き、誰もが支援者として活躍できる、それが「地域共生社会」だとまとめた。

【第5回目のふりかえり】

私たちのまち・羽島のまちづくりをふりかえり、羽島市が目指す「みんなで創る地域共生社会」のかたちを考えた。深刻な財政難のなか市が抱える課題の解決には地域住民の力が不可欠であり、特に災害時においては行政対応よりも住民同士の助け合いや支え合いこそ有用だと主張し、市民力への期待とともに市民のまちづくりへの意識を高めた。

成果の広報・公表

年4回発行の広報紙くろーばあおよびHPにて研修報告をしました。今年度から岐阜羽島ボランティア協会でもフェイスブックを始め、参加申込に加え、動画での研修報告もできるようになりました。講師や参加者の中には、自身のFBやブログなどで本研修会の内容を取り上げるなど、個

人レベルでの広報活動が広がりを見せ、SNSの効果を実感しました。

また、事業記録用に撮影した写真やDVDを活用して、当法人の職員を対象とした内部研修を行いました。全5回の研修会をふりかえり、職員間の情報共有と意見交流を通して、地域支援のあり方について知識理解を深めました。

今後の展開

毎回各分野から講師を招いての研修会でしたが、支援の現場ではいつも、NPOやボランティア、地域住民などによる取り組みが注目を集めていました。そして、「社会的孤立」は決して他人事ではなく身近な問題としてあること、個人レベルでもできる支援策があり、誰もが支援者となり得ることを学びました。

今後は同様の研修会を継続して開催するとともに様々なボランティア活動を提案し、具体的な活動へと結びつけ、支援活動に発展するよう努めたいと思います。回を重ねる度、参加者の意識にはたらきかけ、「地域のために何ができるのか」考えを深めてきたように、本研修会を通して得たたくさんの気づきや学びを、今度は私たちが伝え広めることで仲間や協力者を増やしていくことが、地域の支援者を増やし地域の支援体制を整えることにつながると考えています。